



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

森?外「天寵」論：芸術青年へのアドバイス

著者	王 晨野
雑誌名	日本文藝研究
巻	72
号	1
ページ	75-91
発行年	2020-10-30
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029144

森鷗外「天寵」論

——芸術青年へのアドバイス

王 晨 野

一、はじめに

「天寵」は大正四年四月に雑誌『ARS（アルス）』第一巻第一号に発表された小説である。雑誌『ARS』は阿蘭陀書房によって発行された。その阿蘭陀書房は、鷗外と上田敏が顧問、北原白秋が顧問兼編集長、白秋の弟北原鉄雄が社兼営業部長になっている。大正六年に、社名は阿蘭陀書房からアルスに変更した。

ARSの意味はラテン語の「芸術」である。雑誌『ARS』創刊号の後書き「阿蘭陀書房の言葉」で、「移り星変れども世に不思議なる芸術の矜は尽きず」、「詩は自動車の叫びとなり、絵は三角となるこの頃のかりこもの乱れに、プラグマチズムの烽火いかに勢ひたりとも、つりしのぶ昔の恋の物のあはれぞいやさらになつかしき」⁽¹⁾という詩的情緒あふれた文から見ると、詩や絵画などの芸術活動への支援に尽力する姿勢が窺える。

鷗外の日記、大正四年三月十四日の条に、「夜北原隆吉（引用者注…北原白秋）来て書店の事、雑誌の事を話す。書店は初めて丁子屋となづけむとせしを、後改めて隆哲とす。雑誌はARSと題することに蹴決したりと云ふ」⁽²⁾と記録

したように、白秋が鷗外に雑誌『ARS』の執筆を依頼した。そして、四月十六日に「天寵を書き畢る」、十八日に「天寵を北原隆吉に郵寄す」⁽³⁾と、鷗外は『ARS』の主旨に沿った上、わずか二日間で、芸術青年M君についての小説「天寵」を書き終えた。

小説のあらすじは、M君が某展覧会で落選したので、審査員の「私」に理由を聞くために訪ねてきたことをきっかけに「私」と親交を深めた。周知のように、「天寵」の主人公M君は宮芳平（明治二六年～昭和四六年）であり、落選した絵は大正三年十月の第八回文部省美術展覧会に出品した「椿」（旧題「愛」）である。鷗外の日記に大正三年十月十二日の条に「画家宮芳平来話す。猶美術学校生徒なり」⁽⁴⁾と示したように、小説は概ね実際にあった出来事を基に書かれた。

鷗外と宮芳平の関係については、山崎一穎氏の著書『鷗外ゆかりの人々』（おうふう、平成二年）に詳しく書かれている。鷗外と宮芳平の直接の関係だけではなく、W先生のモデルとなった和田英作は鷗外の友人原田直次郎の弟子であり、鷗外の知人でもあるなど、鷗外と宮芳平の共通の知人が書かれている⁽⁵⁾。また、小島初子氏の著書『天寵残影―宮芳平伝』（冬芽社、平成二年）や、宮芳平の自伝をまとめた一冊『宮芳平自伝―森鷗外に愛された画学生M君の生涯』（求龍堂、平成三年）にも、鷗外のこと言及された。

しかし、「天寵」は実事に基づいて書かれた小説であるため、結局のところ、實在の人物宮芳平の存在が過大になり、鷗外と宮芳平の関係性について多く論じられてきた傾向がある。そのため、結果的に研究の視点が宮芳平とM君に留まり、「私」と鷗外や小説自体に関する分析がまだ不足であると言わざるを得ない。

小説「天寵」についてまとめて論じたのは清田文武氏だけである。清田文武氏は、「天寵」における作品の構造、及び第三者的・客観的に使われた「M君」と主観的・情情的に使われた「君」への視点転換⁽⁶⁾を分析し、「運命にか

かわる内からの契機と外からの契機とが織り合わされ、呼応し合ってM君の今が形成されているのである。しかし、その経歴談で示され、「私」の語りによって明らかにされた現在のM君は、自らの境位とその意味・意義とについては、自身明確には掴んでいない」⁷⁾と結論付けた。

本論は小説に視点を置き、小説と実話のズレ、小説「天寵」が書かれた意図を研究した上で、鷗外の宮芳平に対する態度の原因を究明する。

二、「天寵」と「琅自伝」

まずは宮芳平について簡単に紹介する。

宮芳平は明治二十六年に新潟県に生まれた。明治四十四年に中学卒業した後を上京し、太平洋画会研究所に入会し、所長の中村不折の指導を受けた。明治四十五年、白馬会洋画研究所に入会し、教授の黒田清輝の指導を受けた。大正二年に東京美術学校に合格した。大正三年三月に東京上野で大正博覧会が開催され、出品した油画「カーテン」が入選した。同年八月に父末八が病死、十月十二日に第八回文展に出品した「椿」が落選したと知り、当日に鷗外を訪ねた。その後、三月六日にも鷗外に訪ね、鷗外と親交を結んだ。鷗外は大正四年六月に宮芳平の油画「歌」を購入、十二月に油画「落ちたる楽人」を購入した。大正四年九月、宮芳平は第九回文展に油画「海のメランコリー」を出品し、入選した。

また、宮芳平は『AYUMI』という個人通信誌を発行していた。発行した時期は、昭和八年三月から昭和十四年九月までの二十一号と、昭和三十六年三月から昭和四十一年九月までの通巻四十号の前期と後期の二つの時期に分かれた。個人通信誌『AYUMI』に詩や文章を書いた以外、宮芳平は琅と自称し、「琅自伝」という自伝を掲載した。「琅

「自伝」は時間順に誕生、子供の時代から、大正十二年の関東大震災と恩師の中村彝の死去までのことを記録し、その後、『AYUMI』に自伝の補足や現在の生活なども書かれた。

「天寵」出版後、M君として知られた宮芳平は「天寵」について次のように回想した。

そうした鷗外の恩寵に、琅が充分に——或いは幾分でも応え得たかは別問題として、あの時——その時、琅は立派な若者だったと思う。

たとえ或る種の叡智が欠けていたとしても。(8)

「琅自伝」や自伝に関する回想で、宮芳平は自己を過小評価する傾向が多く見られている。そのことについて、山崎一穎氏は次のように指摘した。

「AYUMI」掲載の『琅自伝』を読み進んで来て、鷗外の『天寵』を読み比べると、そこに落差がある。『天寵』は向日性の青年として描かれているが、自伝は屈折の多い多感な、どこか縮こまっている青年として語られている。イエスを想う芳平が、自虐的なまでに自己を省察する所から始まっている。宮芳平の精神史であると同時に懺悔の書でもある。(中略) 求道者として誠実に生きようとした芳平が己の卑小さを飽くことなく分析して止まない所に自伝は成立している。(9)

山崎一穎氏が指摘したように、宮芳平の実像とM君の人物像はズレがあり、M君のほうは向上心を持つポジティブな青年として描かれている。しかし、「天寵」で描かれた物語は、あくまで鷗外が大正三年十月から「天寵」を書き終わった大正四年四月の半年の間、宮芳平と行った二度の面談だけが原型となっている。鷗外は宮芳平の性格について詳しく把握できたとは考えにくい、同時に鷗外の目に写った宮芳平青年は、怯えずに面識のない審査員を訪ね、

率直に発問、素直なM君のような青年であった可能性もないわけではない。

しかし、「天寵」で描かれた出来事と「琅自伝」で宮芳平が回想した出来事を比較すると他にも少しズレが生じる。「天寵」で、「私」とM君の初対面の出来事が次のように書かれている。

私の所へ、アカデミイの制服を着た一人の青年が尋ねて来た。瘦長で色が稍蒼い。長くした髪を肩まで垂れてゐる。これが点描の画の作者であつた。名はM君と云ふ。

(中略)

私は初め知らぬ人の名刺を見て、玄関へ用事を問ひに出たので、これだけの話は玄関で聞いた。一体 *reuss* (引用者注…落選者)⁽¹⁰⁾は他の落伍者と同じく、逢つて心持の好い人は少ないものである。それにM君はいかに無邪気で、其口吻には詞を構へて言ふやうな形跡が少しもなかつた。私は聞いてゐるうちに気の毒になつたので、「兎に角上がり給へ」と云つて、書斎へ通して茶などを侑めた。

小説では、「私」はM君のことを知らないが、直接に玄関へ用事を聞きに行き、M君のことが無邪気で気の毒だと考え、書斎へ通した。しかし、『琅自伝』⁽¹¹⁾や宮芳平の鷗外に対する回想⁽¹²⁾では、その日の前日、鷗外の娘の茉莉が熱が出ていた。そのため、宮芳平が来た日、鷗外は家で休んでいる茉莉の看病をしていた。その代わりに、妻のしげが玄関で用事を聞き、鷗外と宮芳平の間を取り次ぎ、宮芳平は書斎で初めて鷗外と対面した。そして、鷗外と宮芳平の対面では、鷗外はお茶を運んできたしげに「お前もそこに坐り」と言い、しげは「鷗外と芳平の間の、少し引き下がった場所に坐つ」⁽¹³⁾ていた。それに対して小説では、妻は書かれなかった。また、具体的な日にちは記録されていないが、宮芳平が鷗外に画を持って行った時に、鷗外は子供に画を見せたことがある⁽¹⁴⁾。

小説では、竹見やW先生などの人物が出てきたが、あくまでM君の語りの中でしか登場していない。すなわち、小説の舞台は「私」の書斎であり、「私」とM君の対話だけによって小説は成り立っている。小説の初めの審査員たちという不特定多数の人物を除き、実際の登場人物は「私」とM君の二人だけにした。ゆえに宮芳平が回想しているような「森さんは一家総出で私を愛してくれました」⁽⁵⁾という「私」一家からM君に対する愛が作品で描かれているわけではなく、あくまで審査員の「私」一個人が無邪気で向上心がある若者M君に対する情であり、真摯に向き合う姿勢を描こうとしている。

三、「天寵」から見る鷗外の芸術観

「私」はM君の絵を初めて見た時、次のような印象を抱いた。

去年の某展覽会に大きい油画を出して落選した人がある。画は頗る強烈な顔料で細かい点を打つたやうにいたものであつた。瞥見すれば、彩色の濃やかな氈のやうに見え、又碎いた硝子に光線が中つて屈折せられてゐるやうにも見えた。諦視すれば、其中に二つの人物が模糊として認められる。裳の廣がつてゐる処から推すれば、女であらう。En face（引用者注：正面）になつてゐる背後の人と、profil（引用者注：横顔）を見せてゐる前方の人と、顔が半ば重なり合つてゐる。足の辺に赤と緑との、稍大きい斑がある。椿の花ででもあらうか。

「私」はその絵について、印象に残つたのは二点あり、強い色彩と点を打つような描き方である。この絵は再三考の部に入られた。審査員たちは「あれはどうしよう」、「まあよさう」と自問自答していたので、入選されなかつた理由が不明だと書かれた。しかし、現実はどうだろうか。

明治時代の日本における洋画美術界は黒田清輝、久米桂一郎をはじめとした「新派」と、鷗外の友人、原田直次郎が属する「旧派」に分けられている。「新派」は陰影部分を紫に塗ることにより、明るく清新的な画風を有することに対し、「旧派」は陰影を黒、褐色に塗り、濃厚な色彩を使う。

大正二年十一月、有島生馬、梅原龍三郎、石井柏亭、湯浅一郎の四人が鷗外を尋ねた。彼らは「黒田清輝を筆頭とする穏健な画風が支配する文展の審査に異議を唱え」、「日本画部が旧派と新派を一科、二科に分けたように、洋画部も二科に分けることを提案した」。結局、審査員の間に意見が分かれ、鷗外は「新旧派という括りは不動ではなく、時代と共に移ろうものだ」と主張し、反対の立場を取った⁽¹⁶⁾。その中、黒田清輝を始めとした「新派」が文展を牛耳ったことが窺える。

文展に出展した宮芳平の画「椿」について、澤田龍太郎氏は次のように指摘した。

芳平は他にも点描を描いているのだが、この作品（引用者注「椿」）に特徴なのは光がないのである。分厚いカーテンで遮蔽された部屋に二人の女性が寄り添っている。画面は暗く、女性の姿は臃で、輪郭もはつきりしていない。このような暗い点描画を他に見たことがない。「光」を色分解することで輝きを描こうとする点描にふさわしくないのである。すでにスーラら新印象派による点描技法はヨーロッパで旺盛を極めており、帰国した教授などからその技法について芳平も聞いていたかもしれない。しかし、ゲーテの色彩論を基とする点描の理論からすると、果たして芳平は「いわゆる点描画」を描こうとしていたのだろうか、もしかすると、これは「いわゆる点描画」のではなく、黒をハッチングで塗り重ねていく、エッチングやペン画の技法を独自に油彩に仕立てた芳平オリジナルの点描技法だったのではないだろうかと思ってしまう。往々にして実験的な作品というものは一般には受け入れ難い。この作品もあえなく第八回文展に落選してしまう。⁽¹⁷⁾

宮芳平の「椿」は暗く光がない点描画であった。このような濃厚な画風は「新派」が主流となった文展では受け入れがたいだろう。また、宮芳平は点描という技術を使ったが、光を分解することを基本とする点描画に相反し、従来の点描画から離れた、光がない試作を行った。点描画においては革新的な試みであった。

小説では、「私」は画、ない。しかし小説や脚本の「試み」をして見たことがある」という一文がある。鷗外が「小説や脚本の「試み」という句を使ったのは、恐らく明治末期から大正期にかけて力を入れている近代劇・新劇の「試み」や大正期から書き出した歴史小説という「試み」を指しているのだろう。鷗外は自分が小説や脚本における「試み」と宮芳平が絵画における「試み」から、文学と絵画などの芸術の根底に共通している芸術観が見えたのではないだろうか。

このような革新的な芸術の「試み」について、鷗外は次のように書いた。

己は十九世紀の後半は芸術破壊の時代であつたとおもふ。何故といふに、彫刻絵画は十五六世紀に形式が出来た。詩は縦令十三世紀の間に一つのダンテが居たとしても、大体から言へば十六七八世紀に形式が出来た。その他の諸芸術も似たり寄つたりだ。かやうに隆盛の時があつた後には、幾度か末流が出て小波瀾を起こしても、そのしくじりは踏襲のしくじりで、そのてがらは模擬のてがらだ。そこで英雄豪傑の士は技癢に堪へない。どうかして前人の形式を破壊して見たいといふ願はこゝに生じる。己は十九世紀後半の芸術の歴史は此破壊者の歴史だとおもふのだ。⁽¹⁸⁾

この文について、清田文武氏は次のように解釈した。

芸術の形式の破壊ということは、それと表裏の関係で、そこに新しい形式の創造がなければならない。芸術の制作に当たって

は、ただ破壊があるのではなく、破壊は新しい建立によってなされるからである。芸術の形式の破壊と創案とはおのずとその内容とも関連することになるが、鷗外はそうした芸術の形式の破壊と建立とに芸術家の願いや功名心を見る。新しい芸術的価値の創造がそこになされるからにはかならない。⁽¹⁹⁾

鷗外は芸術について、従来の芸術の形式を破壊し、積極的に新しい芸術の建立の試みる事を推奨している。また、鷗外の友人原田直次郎について、

形式を模倣して前人のお供をするのは、固より卑しいが、形式を破壊しやうとして去嫌に窘むも矢張どつとしない。それよりはどの時代、どの国の古い作をでも充分に研究して、その上ですなほに積極に新しい芸術を産み出すこと、したらどうだろうか。己はこんなこ考えがあるから、去年死んだ所謂洋画旧派の原田をでも惜しくおもつた。⁽²⁰⁾

と、鷗外が原田直次郎の絵画を好むのは、親交があっただけではなく、原田直次郎が新しい芸術の建立の試みをしていたからである。二人は同じ芸術観を共有している。そこで、鷗外は宮芳平に親しく接したのは、二人が同じ芸術観を共有し、宮芳平の画から新しい芸術の誕生の芽を見出したのではないだろうか。

四、芸術家を目指す若者

小説で、「私」はM君の第一印象は「いかに無邪気で、其口吻には詞を構へて言ふやうな形跡が少しもなかった」というものであり、M君が帰る時、M君の前途を祝した。つまり、「私」はM君のことを無邪気な、前途有望な青年だと認識し、好感を抱いたので、親身に相談に乗った。このような認識は、鷗外の小説「羽鳥千尋」(『中央公論』第

二七年第八号、大正元年八月)の中の「私」の認識に共通している。

羽鳥は実在する人物で、小説「羽鳥千尋」は実在人物の羽鳥から届いた手紙を改編したものである。小説「羽鳥千尋」では、羽鳥は成績優秀、医学を志望し、文学、哲学、彫刻、絵画、音楽など様々な芸術にも素養を持つ青年である。「夏貧」という病気にかかった上、金銭にも困っていたが、志を諦めず、半年間独学して医術開業試験を合格した。そして、羽鳥は後期実地試験を受けるために上京したいが、金銭不足なので、明治四三年の夏に「私」に手紙を送り、助けを求めた。「私」は役所に雇員として羽鳥を入れた。羽鳥は試験の準備をしながら、役所で働いていたが、明治四五年六月に二四歳⁽²⁾の若さで死んだ。

そこで、「私」は「同じ種類の手紙が己の所へは多く届くが、羽鳥のやうな履歴を持った手紙の主は少ない」と、羽鳥の優秀を認めた同時に、「二十二歳にしては、言語も挙動も不思議な程無邪気である」⁽²⁾と、羽鳥の無邪気に好意を持っていた。羽鳥が前途ある無邪気の青年、そして「私」に助けを求めるといふ要素がM君と重なる。M君という人物像は羽鳥の延長線にあると言えるのだろう。鷗外の内心にあるM君と羽鳥の類似性は看過できない。

「天寵」の最後に、以下のようなくだりがある。

それから私はM君にこんな事を言った。君の近業を見せて貰ったのは有難い。しかし君の経歴談を聞かせて貰ったのも、それに劣らぬ有難い事である。君は自分の境遇をひどく不幸だと思つてゐるかしらぬが、一転して考へて見れば、君のやうな *de la fortune* (引用者注…運命の寵児) は珍しい。君は、君の世話をしてくれる竹見のやうな商人が、今の世の中に又有らうと思つてゐるか。又W先生のやうな師匠が又有らうと思つてゐるか。君はどう思ふと、私は云つた。

M君は自分の境遇が意外な *schicksal* (引用者注…照明) を受けたのに驚いたらしく、「なる程、さうでせうかね」と云つて目を睜つた。

M君は竹見やW先生のような人に恵まれた。竹見はM君の学費を払い、部屋を貸し、資金の援助と生活面の世話をした。W先生はM君の画を指導し、M君の話を聞いた。そして、現状に困ったM君に仕事を提供した。また、「私」もM君の話を聞き、M君にアドバイスして励ました。M君は自分のことを不幸だと思っているが、「私」はM君のことを真逆な「運命の寵児」、言わば「天寵」と言った。

その反面、羽鳥が不幸だと思っている。

羽鳥は病気を自覚してから五年目、速成の目的を以つて医術開業試験に志ざしてから四年目に、後期実地試験丈を残して、二十四歳で死んだ。

羽鳥と同じやうな手紙を己によこして、同じ役所の雇員になつて、去年肺結核で死んだ大塚寿助と云ふ男がある。甲山と云ふ名で俳句を作つて、多少人にも知られてゐた。世間にはなんと云ふ不幸な人の多いことだらう。²³

明治四〇年代に、鷗外の周りに何人の才気ある若者が死んだ。明治四一年に劇評家である弟の三木竹二、本名森篤次郎が四一歳で死んだ。明治三五年に上京し鷗外の世話になつた俳人大塚甲山（寿助）は明治四四年に三一歳で死んだ。そして、明治四五年に二六歳の羽鳥千尋が死んだ。才気ある若者の早死は不幸だ。それに対して、健康で夢を追うM君はとても幸運に見える。

また、羽鳥は本当に金銭に困つていた。

私の家の財政は東京に滞留することを許さないばかりではない。よしや入費なしにゐられるとしても、少しの小使を郷里から取り寄せることもむづかしい。

(中略)

私は種々の計画をして見たと云つた。その一つを挙げて言へば、岩鼻の火薬製造所の診療部にゐる軍医の下働にならうとしたことがある。併し此運動は私が頼んで置いた人の油断で成功しなかつた。

(中略)

先生。どうぞ私を書生にして置いて下さい。私は廃滅に垂々としてゐる一家の運命、亡き父の名誉、頼りなき母と薄命なる妹の性命を、一しよに束ねて先生に託する。²⁴⁾

羽鳥は財政改善のために、「種々の計画」を立てたが、「頼んで置いた人の油断で成功しなかつた」。羽鳥は周囲に助けてくれる人がおらず、途方に暮れた状態で「私」に手紙を送つたのだらう。それに対して、M君の周りに援助してくれる竹見やW先生がいる。すなわち、M君は羽鳥と比べれば、健康な身体を持ち、人に恵まれたことが、羽鳥のような青年に比べれば、いかに「運命の寵児」のように見えたことであろうか。

そして、「私」はM君に師友の交際を勧めた。

それから、私はM君に、アカデミイの先生方の中で誰の所へ出入するか、又生徒の中に芸術上の友として交る人があるかと尋ねた。しかし、M君は余り教授をも訪問せず、同学の人達にも交を求めぬらしかつた。私は師友の間で刺戟を受ける利益を説いて、君に交際を勧めた。そして、君を慰め、君の前途を祝して帰した。

現実でも、宮芳平の回想で、鷗外は執拗なほど宮芳平に友達を勧めた。

鷗外先生はわたしの尋ねる度毎に、「友達はできたか、友達はできたか」と尋ねられた／「まだできません。」それがわたしの答えであった／先生はわたしに尋ねてみると言つて、幾枚かの名刺を与えられた／その中には与謝野晶子、太田正雄などの人達もあつた。青山胤通の名前もあつた／すべての名刺は懐にしたまま無駄にしてしまつたが。

青山胤通のところだけは尋ねた／青山さんは鷗外より立派な邸に住んでいた／わたしは持つてきた絵を出した／青山さんはわたしの欲しいだけの金をくれた／けれども、もっと別な絵がほしいと言つた／わたしの持つていた絵は、バラの花を嗅いでいる女の像だつた／わたしはその話を鷗外にした。鷗外はまたオッホホと笑つて膝を打つた／その絵は「これならわかるだろう。」と言つて鷗外自身のすすめた絵だつた。

その時「晶子を尋ねたかい？」と言つて先生はきかれた。「まだ。」と答えたら、先生は一寸眼を大きくして「晶子は豪いよ。」といつていられた。^四

鷗外が宮芳平に友達として紹介したい人達には与謝野晶子、太田正雄、すなわち木下杢太郎、青山胤通の三人がいる。当時三十代の与謝野晶子は既に歌人として名高かつた。二十代後半の木下杢太郎は本職が皮膚科の医者であるが、中学の頃から画家志望であり、水彩画家の三宅克己に師事していた。そして、明治四一年に美術と詩人の集まりである「パンの会」にも入会しており、文学と芸術に造詣が深い。五〇代の青山胤通は明治天皇の侍医、宮内庁の御用掛であつた。そして、宮芳平は三人の内に青山胤通だけを尋ねた。鷗外の勧めで、小説で現れた「一枚は珍しく美しい娘の裸体の buste（引用者注：半身像）で、méditation（引用者注：瞑想）」とでも題しそうな表情をしてゐる。背景は明るい地に赤い花が散らしてある。今一枚は赤い花を手まさぐつて俯向いた少女である」の二枚の油画を青山胤通に売つた。

小説では、「私」が師友の交際を勧め、「師友の間で刺戟を受ける利益」を説いた。恐らく鷗外が言いたかつたの

は、師友だけではなく、人と人の交わりによって生まれた利益だろう。また、「晶子は豪いよ。」という発言や、青山胤通に画を売るのを勧めたことは、直接に金銭の利益に結びつける現実味ある行動である。

しかし、「刺戟を受ける利益」はそれだけではない。小説で、「師友の間で刺戟を受ける利益」の前に、「画に欠点がないにも限るまい。これは君が何を能くするかと云ふ問題である」と、M君の画に物足りなさを感じた。また、アカデミーの先生は「奇抜にばかり遣らうと思つては行かん」と言った。M君の画は何か足りないものがあるとアカデミーの先生と「私」が感じていた。つまり、「私」が勧めた「師友の間で刺戟を受ける利益」がM君の画に感じた物足りなさを補足でき、芸術家の本質にある問題とつながっている。

ならば、芸術家の本質にある問題はなんだろうか。

鷗外は明治四三年三月から明治四四年八月までに、雑誌『スバル』第二年第三号から第三年第八号にかけて「青年」という小説を発表した。「青年」は、地方出身の小泉純一が小説家を目指して上京した物語である。画家を目指し、上京したの宮芳平と同じである。「青年」で、純一は学生や学者や未亡人と交流を行い、書こうとする主題を見つけた。

「青年」の主題について、長谷川泉氏は次のように指摘した。

できの悪い作品「青年」の内容を構成する主軸は三つある。すなわち、純一の創造力が芸術家として成熟する過程。その二は、純一の人生観・世界観、とくに自然主義勃興当時の個性の覚醒や新時代の道徳思想などに促されて成長してゆく考え方の形成過程。その三は、純一の恋愛および性慾の体験。（中略）そして、これら二つのモメントは、すべて第一のモメント、純一の作家としての成長に帰結する。²⁶⁾

「青年」での主軸は芸術家として成熟する過程、人間として成長する過程、恋愛および性慾の体験の三つがあるが、結局、人間として成長する過程と、恋愛および性慾の体験が芸術家として成熟する過程に帰結することになる。要するに、人間としての成長も、恋愛および性慾の体験も、純一を芸術家として成熟させていく。芸術家にとって、人生と芸術は密接しているのである。人生の経験は芸術の糧になる。これは「私」が師友の交際を勧めた理由ではないだろうか。師友との交際によって「人生のあらゆる事物を領略」し、芸術性も豊かになるのである。

五、終わりに

宮芳平と鷗外は以下のような会話があった。

「誰でも私の絵を奇態な絵だと云ひます」と先生に申し上げますと、先生は例のやうにポンと膝を打たれて、オッホッホと笑はれます。その次ぎに急に真顔になられて、「ウム、奇態だ。しかし君、毛虫はどうだ。奇態だらう。だが、せつせと葉を食べてゐる中に蝶になる」。²⁷

新しい点描画を試みた宮芳平は「奇態な絵だ」と非難されたが、鷗外は真顔になって毛虫も奇態だが、いずれに蝶になると励ました。宮芳平の新しい芸術の試みは、従来の芸術の形式を破壊するものであり、鷗外が目指した新しい芸術の建立と一致した。そこで、鷗外と宮芳平は芸術観が共通しているのだろう。

また、鷗外は大正四年六月に宮芳平の油画「歌」を購入、十二月に油画「落ちたる楽人」を購入した。これも鷗外なりに芸術家を目指している宮芳平への応援だろう。また、前述したように、「天寵」が掲載した『ARS』は芸術家を目指す若者への激励を目的とする雑誌である。「天寵」で、芸術家の本質にある問題を鷗外なりにアドバイスした

のい、『ARS』の主旨にも契合しているのであろう。

※初出：『ARS』第一巻第一号、大正四年四月。

本文引用：『鷗外全集』第十六巻、岩波書店、昭和四八年。

なお、全ての引用は、原則として新字に改め、ルビは省略した。

注(1) 阿蘭陀書房、「阿蘭陀書房の言葉」、『ARS』第一巻第一号、大正四年四月。

(2) 森鷗外、「大正四年日記」、『鷗外全集』第三五巻、岩波書店、昭和五〇年一月、六五五頁。

(3) 注(1)に同じ。

(4) 森鷗外、「大正三年日記」、『鷗外全集』第三五巻、岩波書店、昭和五〇年一月、六三八頁。

(5) 山崎一穎、「宮芳平」、『鷗外ゆかりの人々』、おうふう、平成二一年五月、三五八～五〇九頁。

(6) 清田文武、「森鷗外「天寵」の世界（下）」、『新大國語』第二七号、平成一三年三月。

(7) 清田文武、「森鷗外「天寵」の世界（上）」、『新大國語』第一九号、平成五年三月、四七頁。

(8) 宮芳平、「琅自伝二」、堀切正人編・注、『宮芳平自伝―森鷗外に愛された画学生M君の生涯』、求龍堂、平成二二年四月、二四〇頁。（初出：『AYUMI』後期二二号、昭和三八年七月、一、五～一二頁。）

(9) 注(4)に同じ、三八四頁。

(10) 本文の注釈は全部堀切正人氏が宮芳平の注釈をもとに補った注釈を引用した。

(11) 宮芳平、「琅自伝一」、堀切正人編・注、『宮芳平自伝―森鷗外に愛された画学生M君の生涯』、求龍堂、平成二二年四月、二二〇頁。（初出：『AYUMI』後期二〇号、昭和三八年六月、二、七～一二頁。）

(12) 宮芳平、「鷗外の追憶一」、堀切正人編・注、『宮芳平自伝―森鷗外に愛された画学生M君の生涯』、求龍堂、平成二二年四月、四二八～四二九頁。（初出：『AYUMI』後期一四号、昭和三六年十二月、二～七頁。）

(13) 小島初子氏、「父の死と鷗外」、『天寵残影―宮芳平伝』、冬芽社、平成一一年一月、一四一頁。

(14) 宮芳平、「天寵」前後、『鷗外全集翻訳編』第十六巻附録『鷗外研究』第二八号、岩波書店、昭和一四年二月、三～四頁。

- (15) 宮芳平、「天寵」、堀切正人編・注、『宮芳平自伝―森鷗外に愛された画学生M君の生涯』、求龍堂、平成三二年四月、四二五〜四二六頁。(初出：『AYUMI』前期一九号、昭和一三年二月、一九〜二二頁。)
- (16) 川西由里、「鷗外が見た明治、大正の美術」、『森鷗外と美術』、森鷗外と美術展実行委員会、平成一八年、一五頁。
- (17) 澤田龍太郎、「はじめに」、『宮芳平画文集 野の花として生くる』、求龍堂、平成二五年八月、六〜七頁。
- (18) 森鷗外、「漆休録」、『鷗外全集』第二五卷、岩波書店、昭和四八年十一月、二一九頁。(初出：『歌舞伎』第四号、明治三三年七月。)
- (19) 清田文武、「鷗外と芸術の形式」、『鷗外文芸の研究 中年篇』、有精堂、平成三年一月、一五七〜一五八頁。
- (20) 森鷗外、「外山正一氏の画論を駁す」、『鷗外全集』第二二卷、岩波書店、昭和四八年八月、二一四頁。(初出：『柵草紙』第八号、明治三三年五月)
- (21) 小説「羽鳥千尋」は明治二二年に生まれ、二四歳で死んだが、実在人物の羽鳥千尋は明治一九年に生まれ、二六歳で死んだ。
- (22) 森鷗外、「羽鳥千尋」、『鷗外全集』第一〇卷、岩波書店、昭和四七年八月、五二一〜五二二頁。(初出：『中央公論』第二二七年第八号、大正元年八月)
- (23) 注(21)に同じ、五二二頁。
- (24) 注(21)に同じ、五三九頁。
- (25) 注(11)に同じ、四三二〜四三四頁。
- (26) 長谷川泉、「青年」論、『森鷗外論考』、明治書院、平成三年七月、六三三頁。
- (27) 注(14)に同じ、四頁。

(おう しんや・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程)